

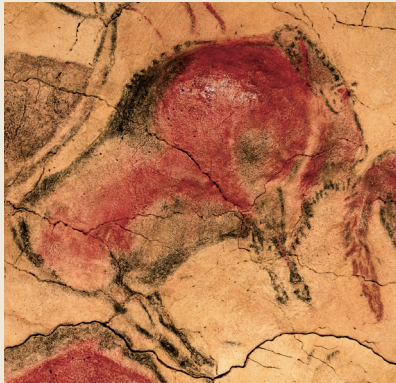
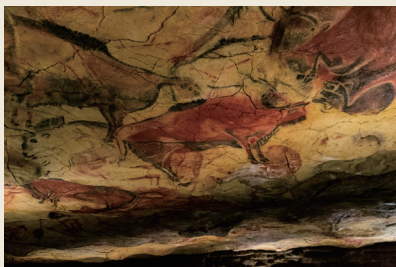
アートと社会をつなぐ——共感の時代の芸術表現

閉ざされたホワイトキューブから軽々と抜け出し、環境問題や社会課題、あるいは教育や経済活動といった生活の基盤となる領域にまで及ぶ、現代のアート・アクティビティ。時代や社会の要請を繊細に織り込みながら進化を遂げる、芸術表現の当今の潮流を俯瞰する。

ユネスコの世界遺産に登録されている「アルタミラの洞窟壁画」をご存じだろうか。

マドレーヌ期と名付けられた時代は、実に1万8,000~1万年前で、旧石器時代末期という遙か遠い昔を指す。現在は入場が制限されているこの洞窟だが、同じ敷地内に建つアルタミラ博物館に展示された壁画の精巧なレプリカは、牛、猪、トナカイなどに近い動物の躍動感溢れる描写が、それは実に見事なものだ。19世紀に5歳の子に発見されるまで、その存在を私たち人類は知る由もなかったのだが、そのような昔に、優れて素晴らしい「絵」が残されていたことに、発見当初は多くの学者が驚愕した。

ユネスコは1980年代に世界遺産に登録する際に、こう理由を述べた。「人類の創造的才能を表現する傑作」と。これこそ、私たちが脈々とつないできた創造



19世紀、スペイン北部のアルタミラ洞窟で発見された実際の壁画の数々。クロマニヨン人が描いたとされる馬、猪、バイソンなどの動物は赤、黄色、茶色など色彩豊かで、ぼかしや線刻など技法も多様

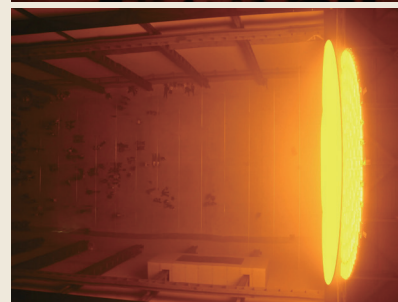
行為の始原とってよいのではないだろうか。芸術は、人間の創造性や想像力を、視覚的・聴覚的、またはパフォーマンス的な形で表現し、応用することをいう。芸術上の表現の目的は、これまでも美的快楽、知的思考の探究や社会規範への抵抗など、さまざまあるが、いずれも個人やコミュニティの価値観や信念を反映するものとして歴史化できる。では、表現もまた時代に連動して変化しているという中で、今日を生きるアーティストたちは、どのようなメッセージを込めた応答をしているのだろうか。

まずは人間と自然界の相互依存と相互関連性を認識するよう、我々に促している作品が増えていることを時代の特徴として挙げてみよう。近代工業化の限界と行き詰まりを見せた世界において、人間存在の意義や希望をどこに求めればよいのかという不安や悩みの表れは、これまでになく混沌とした時代を生きる作家たちが、シンプルな美を追求することを超えていく必要を悟っているように見える。また、気候変動による喫緊の環境問題への取り組みなど、社会課題は一国家国民にとどまらず、関係する相互間の課題としてグローバル化している。

環境は人間の活動の背景となるだけのものではなく、むしろ人間のあり方に積極的に参画するパートナーとも考えられる。アートはデザインやテクノロジーのように、環境問題の具体的／物理的な解決に導くためのツールではない。しかし、アートは柔軟で緩やかで持続的な環境維持への「気づき」を与えるものだ。

オラファー・エリアソンの環境への視点

その視点を持つ作家の例として、オラ



2003年にロンドンの現代美術館テート・モダンで発表した《The weather project》。大きなホールに太陽を模した人工光源と、天井には巨大な鏡面を設置。細かな霧に包まれる中、来場者は自らを映す天井の鏡像に気づき、同じ空間を共有する者同士の予期せぬ交流を生んだ

photo: Olafur Eliasson
Courtesy of the artist; neugerriemschneider, Berlin; Tanya Bonakdar Gallery, New York / Los Angeles

ファー・エリアソンを挙げよう。エリアソンはアイスランド系デンマーク人のアーティストで、光、水、大気などの要素を用いた彫刻、写真、大規模なインスタレーションの作品で知られる。中でも、2003年にロンドンのテート・モダンにあるタービン・ホールで行った《The weather project》は、元・火力発電所の巨大な空間に、永遠に沈まぬ太陽を出現させた作品である。人工の展示空間でありながら、雄大な自然の中にいるような錯覚と幻想を創り出し、感覚的知覚と身体化された体験を通して、その場にいる



© Olafur Eliasson



© Franziska Russo

オラファーは共同でリトルサン社を設立し、ソーラーランプ《Little Sun》を開発。オフグリッドのコミュニティに提供し、持続可能エネルギーへの転換の必要性を広める取り組みを行っている。上：ベルリンの地下鉄内で発光するオリジナルの《Little Sun》。下：《Little Sun》で読書をする女の子

人々に、周囲の環境を深く理解するように促すものだった。自然を観察し、成り立ちや関係性を顕在化させるような形態やメディアの選択は、単純な美の追求というよりは、現代を生きる我々の思考や態度に影響を与える「作品」という実践である。

《The weather project》は人間中心の世界観への揺さぶりとして、発表当時よりも、現代においてより重要性を増している。2012年に始まった送電線のない地域に光をもたらす、太陽光パネルを使った《Little Sun》のプロジェクトや Conference of the Parties (COP) にて消滅しつつある氷河を展示した《Ice Watch》など、アートの世界と環境問題の両方にポジティブな影響を与えたいという、彼の願いを浮き彫りにしている一連の作品群は、まさに時代の希求に回答しているものといえるだろう。



地質学者の ミニック・ロージング (Minik Rosing) と共に、グリーンランドから運んだ氷の塊を展示したプロジェクト《Ice Watch》。2014年にコペンハーゲンで最初の展示を行い、15年にはCOP21開催中のパリで実施した。上：オラファー・エリアソン。下：2018年にロンドンのテート・モダンとブルームバーグ・ヨーロッパ本部の屋外で氷塊を展示 supported by Bloomberg photo: Charlie Forgham-Bailey Courtesy of the artist; neugerriemschneider, Berlin; Tanya Bonakdar Gallery, New York / Los Angeles © 2014 Olafur Eliasson

アート・コレクティブが問う人をつなぐ新たな枠組み

芸術上のプラクティスの数々は、時代を生きる人々のコミュニケーションの変化の影響も受けている。ソーシャルメディアやデジタル・コミュニケーションの台頭により、異なる文化や背景を持つ人々が簡単につながり、経験を共有できるようになった。このようなデジタル空間でのつながりの増加によって、人々は多様な視点を意識するようになり、世界的に共感や相互理解への欲求が高まっているのは確かであろう。

多様性を尊重する潮流は、異なるバックグラウンドや意見、アイデンティティの多様性を認識し、受容する傾向を助長する。歴史的には、アフリカ系アメリカ人による公民権運動やMeTooムーブメ

ントに見られる家父長制度の見直しなどは、いずれも近代社会が誇示してきたシステムだが、近年、アートにおいてもその変更を迫っている。多くのアーティストやキュレーターにとって、多様な人種・民族、ジェンダー、セクシュアリティ、言語などを反映した展覧会やイベントは重要性を増し、国際展のレベルから小規模なものにまで、その態度が問われるようになった。

特徴的なのは、複数の視点が混在するアート・コレクティブやキュレーター・コレクティブたちによるメッセージだ。多くは、これまで周縁化された地域から発信され、ヴァナキュラーな文学や音楽、口頭伝承などの文化的な表現を尊重する動きにも連動している。それぞれ、特定の地域や共同体の独自性や個性を反映するものだが、世界共通のプラットフォームに乗せて、対話を通して同時代を生きる者同士が、理解し合い共存する道を探るのが、グローバル化した世界における一つの潮流であろう。

近年、それを最も象徴的に示したのは、5年に1度、ドイツ・カッセルで開催されるドクメンタである。1955年の開幕以来、芸術の先駆的な展示の一つとしてアートの世界では高く評価されており、歴史的な文脈の読み直しや同時代を反映した考察を促すテーマを掲げ、芸術による意見表明や批判的な対話を促進する役割も果たしている。ドクメンタ15の芸術監督は、ジャカルタを拠点に活動するアート・コレクティブ「ルアングルパ (ruangrupa)」だった。彼らは2016年のあいちトリエンナーレにも参加して、織維問屋1階の事務所を会場に《ルル学校》を開校。会期中は誰もが自由に集って学び、教え合うという観客参加型の「作

Hiromi Kurosawa

金沢21世紀美術館 チーフ・キュレーター／学芸部長。長野県生まれ。ボストン大学（米国）卒業後、水戸芸術館（茨城）、草月美術館（東京）を経て、2003年金沢21世紀美術館建設準備室に参加。

04年の開館以後も「オラファー・エリアソン」「ホンマタカシ」「ス・ドホ」「フィオナ・タン」「ミヒャエル・ボレマンズ マーク・マンダース」など、国内外で活躍する現代美術作家の展覧会を企画。ミュージアム・コレクションの選定、学校連携や幅広い世代に向けた教育普及プログラムの企画も手がける。



2022年にドイツ・カッセルで開催された国際美術展「ドクメンタ15」で、アジア初の芸術監督を務めた「ルアンルパ」のメンバー

品」を発表した。

一般的に作品とは、絵画、彫刻、写真、演劇、映画や、またその融合といったメディアが一般的だが、そもそも活動を作品として、アーティストを運動体と定義することは、芸術表現の拡張、あるいは芸術そのものの意義や目的を拡張した新しさがある。学校では絵を描くことも、対話も、場合によっては食事や散歩も、あらゆることが芸術上のプラクティスとなり得ることを彼らは示した。ドクメンタでは、あいちトリエンナーレの実践を継承して、ヒエラルキーを排除し、誰でも友達を探すことのできる広大なプラットフォームを開いた。来場者は、至る所で「Not Art, Make Friends」のメッセージを目にして、彼らの芸術上のプラクティスに参加したのだった。これは、作品に評価を与えるキュレーターの役割をも大きく転換したものだだった。

芸術の力を通じて社会や文化に対してより包括的かつ包容的なメッセージを発信することを目指すコレクティブは、既存の社会の仕組みの隙間を進む柔軟さがある。これもまたポスト工業時代の行き詰まりを、今までとは異なる方法で、しなやかに作り替えるといった発想と態度こそが、彼らの「表現」の手法だと言い換えてもいい。さまざまな参画者

を得ることで、幅広い視野や経験が反映され、芸術がより多様な人々にアクセス可能で意味のあるものになることも、彼らが示した重要な一つの特徴であろう。

芸術はしばしばコミュニケーションの手段として機能し、アーティスト

が観客にアイデアや感情、視点を伝えることを可能にし、思考を誘発したり、インスピレーションを与えたり、感情的な反応を呼び起こしたりする。したがって、結果は良いことばかりでなく、帰属する集団のアイデンティティの主張が声高になり、個人のそれに勝るケースもある。しかしながら、芸術上のプラクティスは、即座に社会を変革するものではなく、ローカルとローカルをつなげながら、人間同士、そして人間と環境とのつながりを見直し、多様で豊かな世界を構築することを目指すものだ。停滞や後退も創造的価値として考え、ルアンルパは新たな世界の輪郭を作る活動に我々を招いているのだろう。

社会全体へ及ぶ アートの領域

さて、近代が作り上げてきたさまざまな境界を、COVID-19の感染流行などがミクロレベルで易々と越境してしまい、我々はこの先の未来をどのように考えればよいかといった課題に、突然向き合うことになった。このような疫病の影響が人々の心や行動に与えたものは計り知れず、芸術上の表現も、環境との関わりに言及するものが急速に増加している。また、インターネットを介して瞬

時に広がるテキストや画像の情報は、これまでの芸術上の関心事を大きく変えつつある。デジタル技術の進歩は、フェイクと真正性の問題に大きく関わり、AIの普及も大きな変革といえる。表現は文化的・社会的・政治的な物語を形成する上で重要な役割を果たす一方で、曖昧で抽象的で正解という指標を持たず、物理法則にも支配されることはない。したがって、全く異なる次元に人々の意識を差し向けたり、思い出させたりという芸術体験は、行き詰まりを見せる現代の袋小路からの抜け道の提示になり得るかもしれないという期待がある。

芸術と社会との結びつきは複雑で多面的であり、表現は時代の出来事や人々の意識の変化に反応していく。現代のキュレーターはワークショップやレクチャーを通して人々の芸術体験を形成し、作品との有意義なつながりを促す機会を創出する役割を果たしている。コミュニケーションやエンゲージメントは、決して作品と鑑賞者の間だけのものではなく、アートと社会の進化するダイナミクスに関わるテーマを扱う以上、多くの人々の参加は欠かせない。

芸術は、もはやかつての芸術のプラットフォームを超えて、福祉や教育など、いわば人間が生きる上でのインフラに近い領域までを射程に入れた。現代のアーティストたちは、伝統的な芸術的規範に挑戦し、作品を通して社会的・政治的問題に関心を寄せている。そして我々もまた、彼らの作品やアクティビティに接して、異なる視点を探求し、積極的に参加してみるのがいいのではないだろうか。誰であろうと、芸術を取り巻く言説に共感する機会を捉え、自分に引き寄せて考えることはできるはずなのだから。